

2024年3月期 第2四半期 決算説明資料

株式会社ゼネラル・オイスター
(3224)



2023年11月14日



1. 2024年3月期 第2四半期 決算 トピックス



2024年3月期 第2四半期 決算ハイライト

第2四半期の営業利益については過去最少の損失幅

1

売上高は1,782百万円と、前年から増収となり、営業損失も24百万円と、上場以来過去最少の損失幅となり、3Q~4Qの最繁忙期に向け、順調な推移。

主力事業の店舗事業、卸売事業が増収増益で着実に成長

2

主力事業の店舗事業と卸売事業が、前年対比+24.8%と+47.7%のセグメント利益となり、着実に成長。一方、加工事業は受託事業の主力のホタテ加工が、ホタテの価格上昇により、回転すしチェーン向けの受注が大幅に減少し、減収減益となった。

世界初 ノロウイルスフリーの“あたらないカキ”を発表

3

海洋深層水を活用した牡蠣の完全陸上養殖（沖縄県久米島町）に世界で初めて成功。ノロウイルスフリーの“あたらないカキとして、『エイシーオイスター2.0』を8月に発表。

連結損益計算書概要

売上高は1,782百万円（前年同期比3.9%増）となり、コロナ前（2020年3月期）を上回る。

営業損失の24百万円と、最終損失の14百万円は、第2Qとしては上場以来最少の損失幅となり、順調な推移。

	2020年3月期 第2四半期（累計） （参考・コロナ前）		2023年3月期 第2四半期（累計）		2024年3月期 第2四半期（累計）		前年同期比 （%）
	実績 （百万円）	構成比 （%）	実績 （百万円）	構成比 （%）	実績 （百万円）	構成比 （%）	
売上高	1,726	100.0	1,716	100.0	1,782 ^①	100.0	+66 (+3.9%)
売上原価	613	35.5	662	38.5	627	35.2	-34 (-5.2%)
売上総利益	1,112	64.4	1,053	61.4	1,154	64.8	+101 (+9.6%)
販売管理費	1,242	71.9	1,093	63.7	1,178	66.1	+85 (+7.8%)
営業利益	△129	-7.4	△39	-2.3	△24 ^②	-	+15
経常利益	△129	-7.5	△40	-2.3	△26		+13
特別利益	-		10	0.6	2		-9
特別損失	-		13	0.7	3		-11
親会社株主に 帰属する 当期純利益	△113	-6.5	△31	-1.8	△14		+17

① コロナ前及び前年を上回る

② 第2Qでは、上場以来最少の営業損失

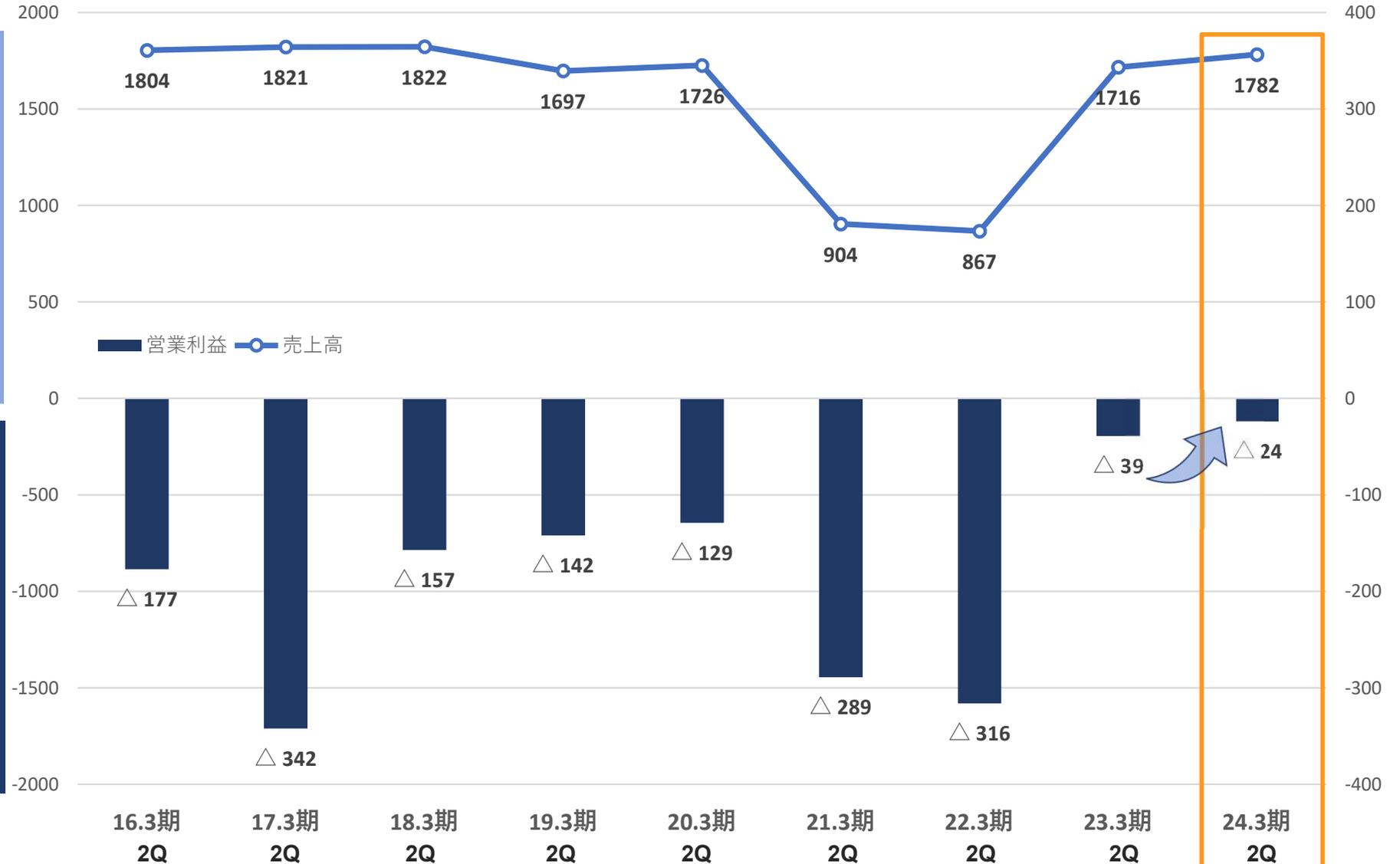
連結業績について

営業損失24百万円となったものの、上場以来最少の赤字幅。コロナ禍の取組が奏功し、損益分岐点が低下し、収益体質が着実に改善していることを確認。

(単位：百万円)

売上高
17.82
億円

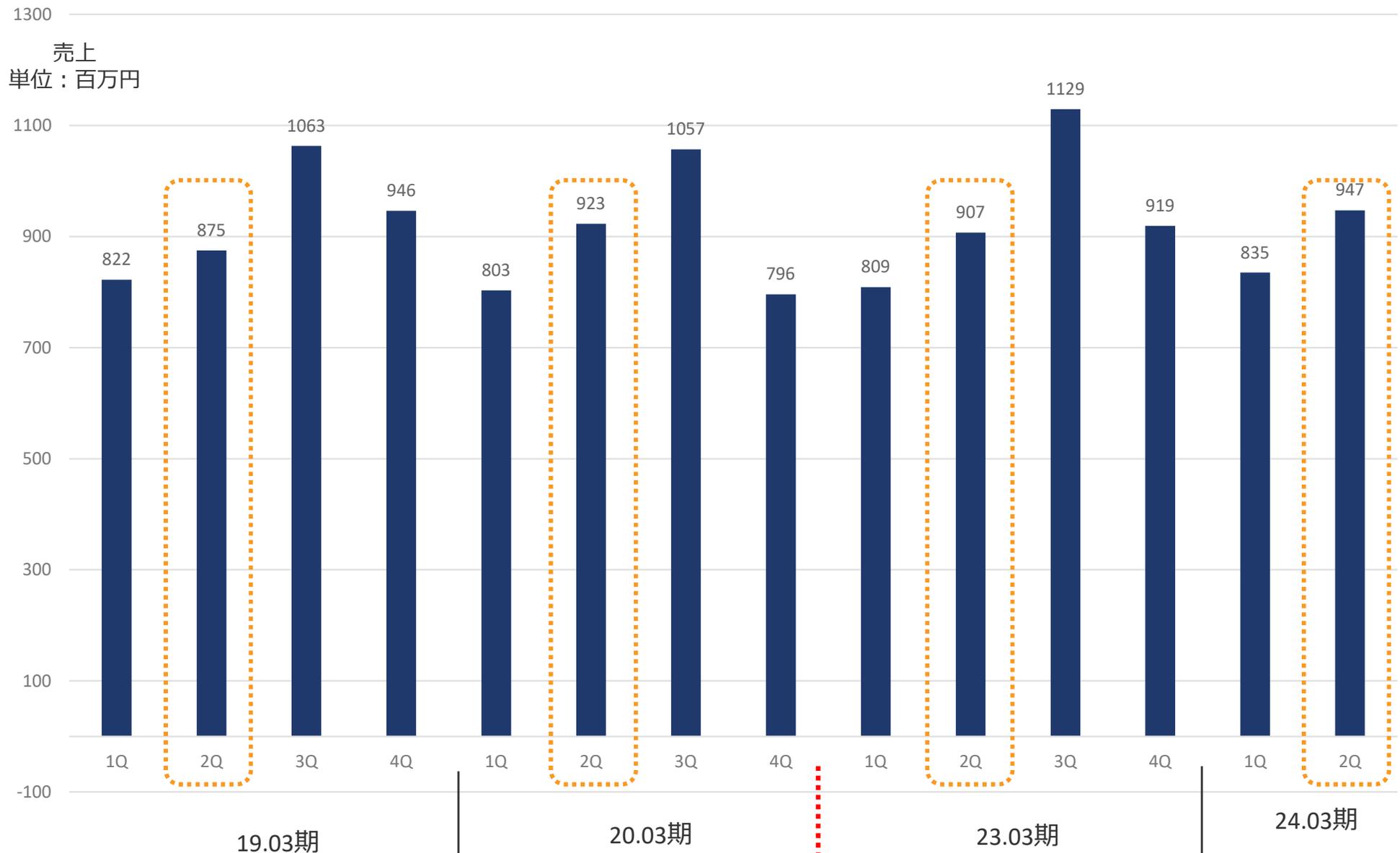
営業利益
△24
百万円
上場以来
過去最少



2015年3月上場

売上の季節変動推移（四半期）

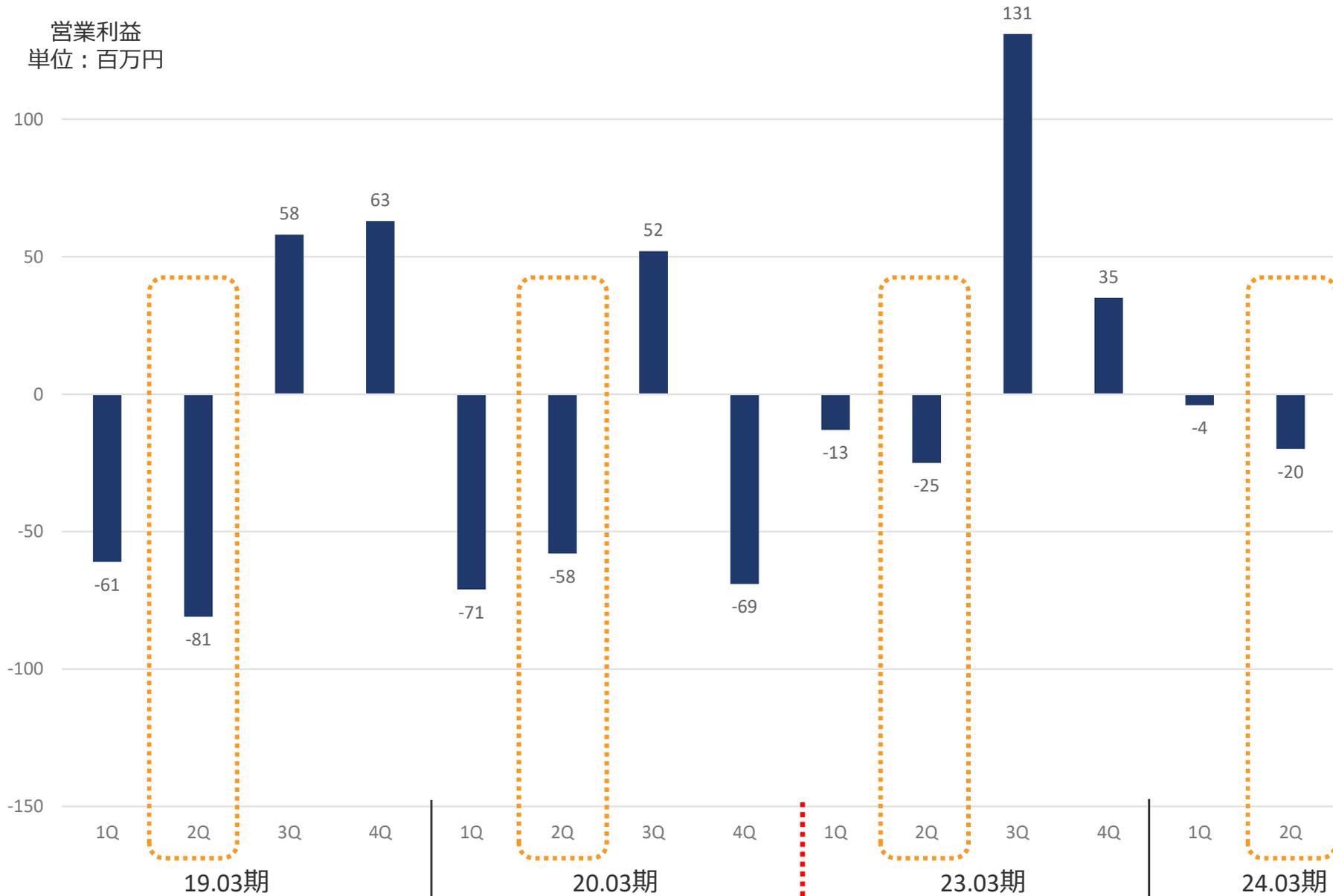
牡蠣に対する消費者の認識上、冬場に売上が偏重する傾向にあるため、第1Q~2Qは、年間で売上が一番少ない時期となり、今後3Q~4Qの繁忙期の売上拡大を例年通り着実に図ってまいります。



※コロナ禍の21.03期~22.3期は除く

営業利益の季節変動推移（四半期）

牡蠣に対する消費者の認識上、冬場に売上が偏重する傾向にあるため、第2Qは、年間で売上が2番目に少ない時期となり、営業赤字の傾向が続いていましたが、コロナ禍の取り組みにより、損益分岐点が下がり、第2Qでも損失幅の縮小が進み、順調に改善。今後は3Q~4Qの繁忙期の営業利益の更なる拡大を図ってまいります。



※コロナ禍の21.03期~22.3期は除く

貸借対照表概要

2024年3月期第2四半期末の総資産は22億円、前期末に対して1億円の減少。

自己資本は10億円、自己資本比率は44.5%を確保。引き続き、収益力を高め、財務基盤の強化を図る。

(百万円)	2023年3月期 期末	2024年3月期 第2四半期		2023年3月期 期末	2024年3月期 第2四半期
資産の部			負債の部		
流動資産	1,592	1,389	流動負債	526	497
現金及び預金	1,334	1,104	買掛金	102	115
売掛金	195	218	短期借入金 ^{*1}	67	67
原材料	39	41	その他	357	315
未収入金	10	-	固定負債	845	776
その他	14	26	長期借入金	454	421
固定資産	798	878	その他	391	355
有形固定資産	424	453	負債合計	1,371	1,272
その他	107	169	純資産の部		
投資その他資産	267	256	株主資本	1,020	1,008
敷金及び保証金	244	248	その他	△2	△12
繰延税金資産	23	7	純資産合計	1,018	995
資産合計	2,390	2,268	負債純資産合計	2,390	2,268

*1．1年内返済予定の長期借入金を含む

セグメント別業績概況

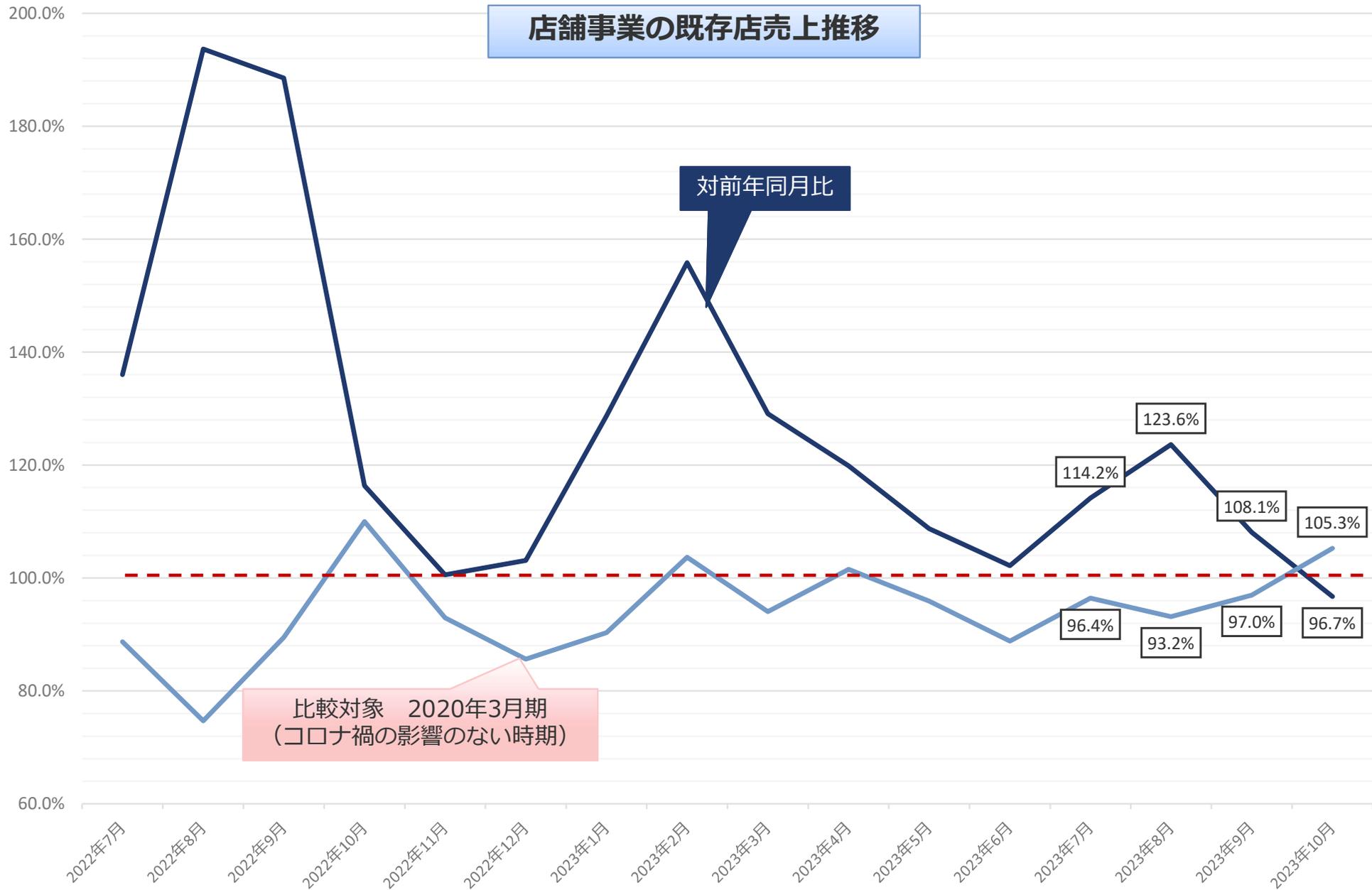
「店舗事業」「卸売事業」はいずれも前期と比較して、増収増益で好調に推移。

「加工事業」については受託事業の受注が減少し、前期に比べ損失幅が拡大。

(百万円)		2023年3月期 第2四半期(累計)	2024年3月期 第2四半期(累計)	前年同期比 (%)	ポイント
店舗事業 オイスターバーレストランでの飲食サービス	売上高	1,375	1,526	+11.0	5月の新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことにより、売上も好調に推移。セグメント利益24.8%向上。
	営業利益	121	151	+24.8	
卸売事業 生牡蠣や牡蠣の加工品の外販卸売り	売上高	151	206	+36.1	取引先も順調に拡大し、売上高も過去最高を達成。セグメント利益47.7%向上。
	営業利益	42	62	+47.7	
加工事業 岩手・大槌工場	売上高	161	31	-80.7	受託事業の受注が減少した影響により、セグメント利益は△38百万円の赤字
	営業利益	△ 17	△ 38	—	
その他 EC通販、海外卸売	売上高	30	35	+15.2	EC通販と海外卸売の売上は堅調に推移
	営業利益	△ 1	5	—	
調整額	売上高	△ 3	△ 17		
	営業利益	△ 184	△ 203		
連結財務諸表 計上額	売上高	1,716	1,782	+3.9	
	営業利益	△ 39	△ 24		

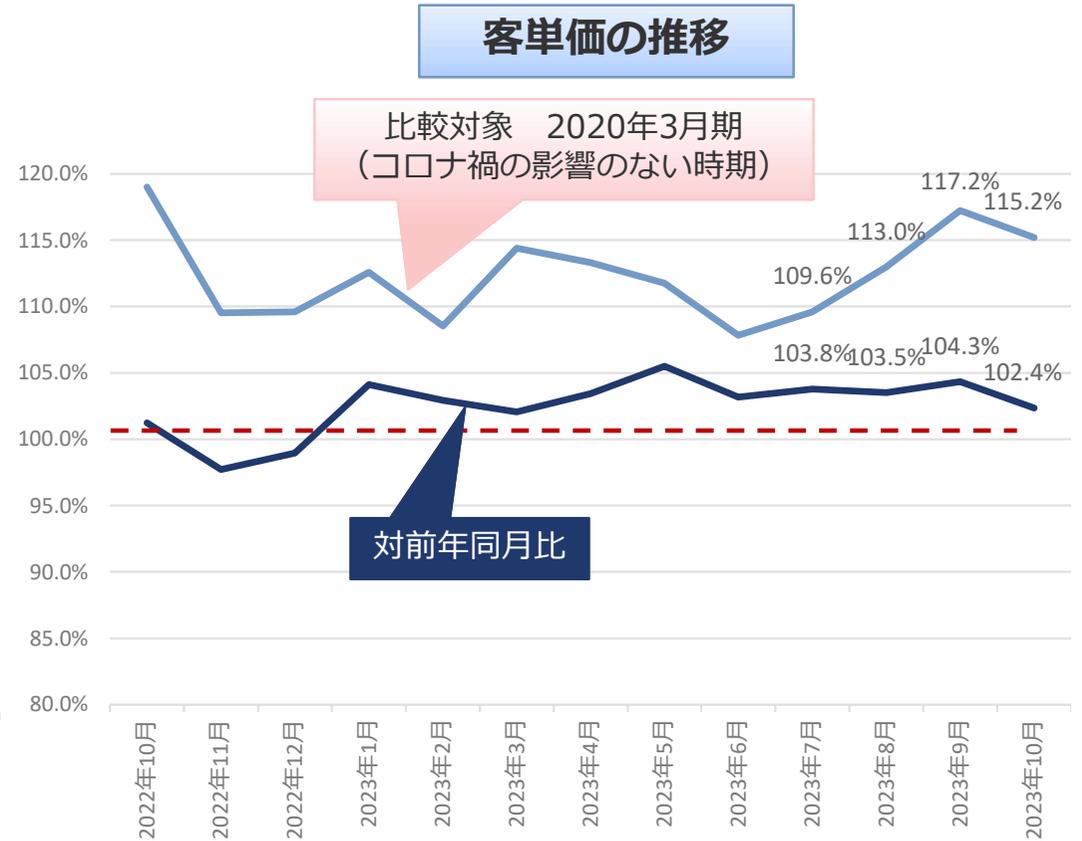
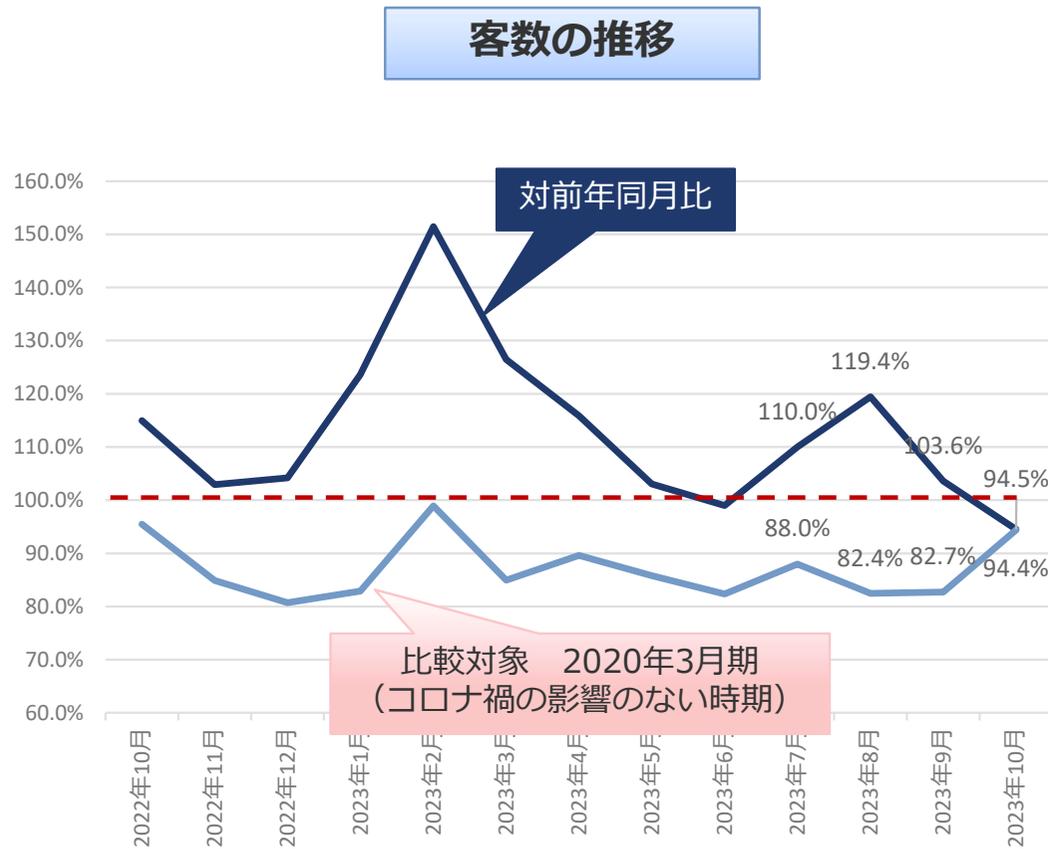
【店舗事業】 既存店売上高（前年比、コロナ前比）

5月の新型コロナウイルス感染症が5類に移行した影響等により、売上高は堅調に推移。



【店舗事業】 既存店客数・客単価（前年比、コロナ前比）

客数は前年比で、堅調に推移。一方、客単価は10%超の増加（コロナ前比）が断続的に継続しており、高付加価値戦略が定着化。



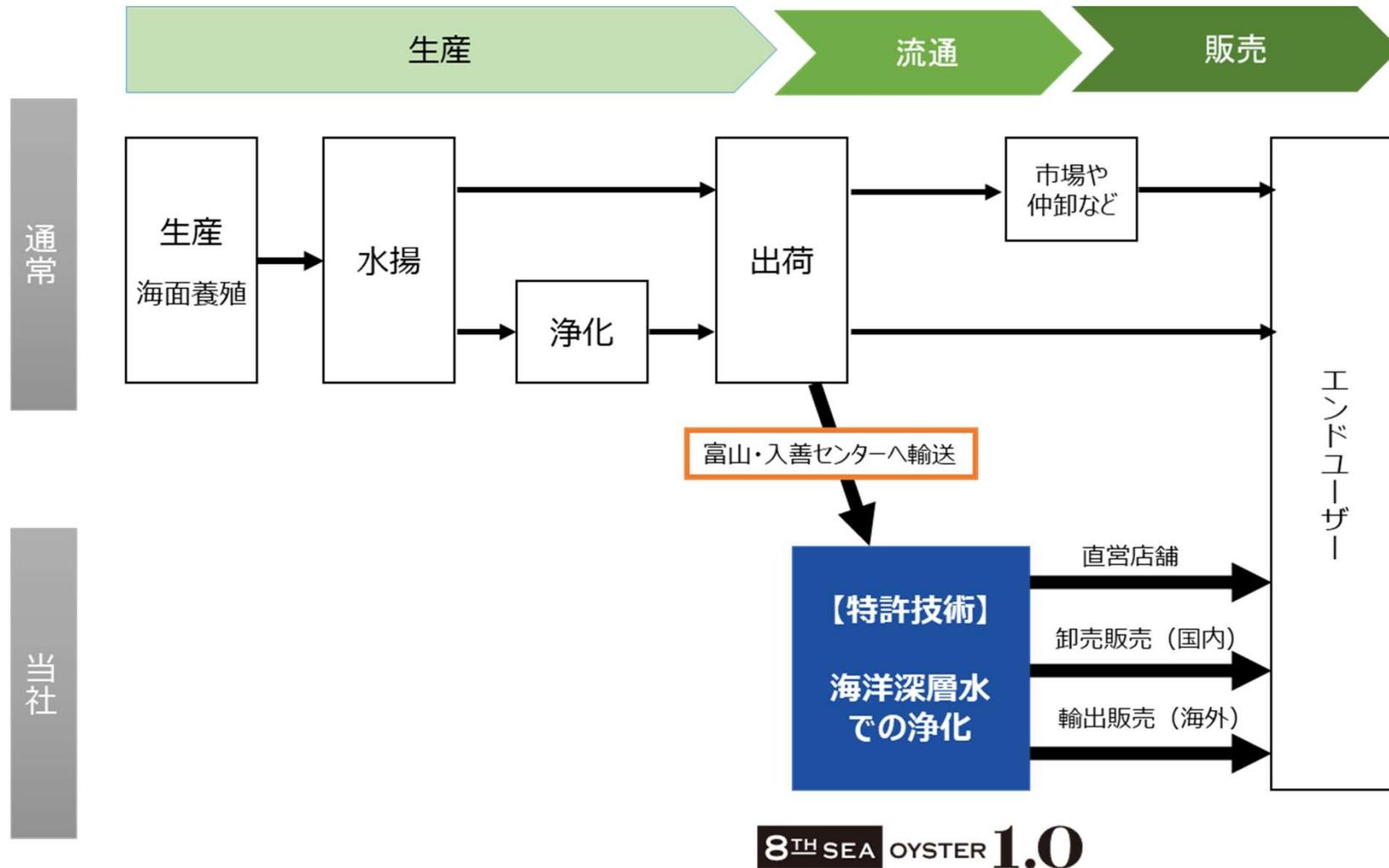
2. 世界初 海洋深層水を活用した牡蠣の完全陸上養殖 ノロウィルスフリーの“あたらないカキ”の成功について



現在の牡蠣流れ（海洋深層水での浄化）

8TH SEA OYSTER 1.0

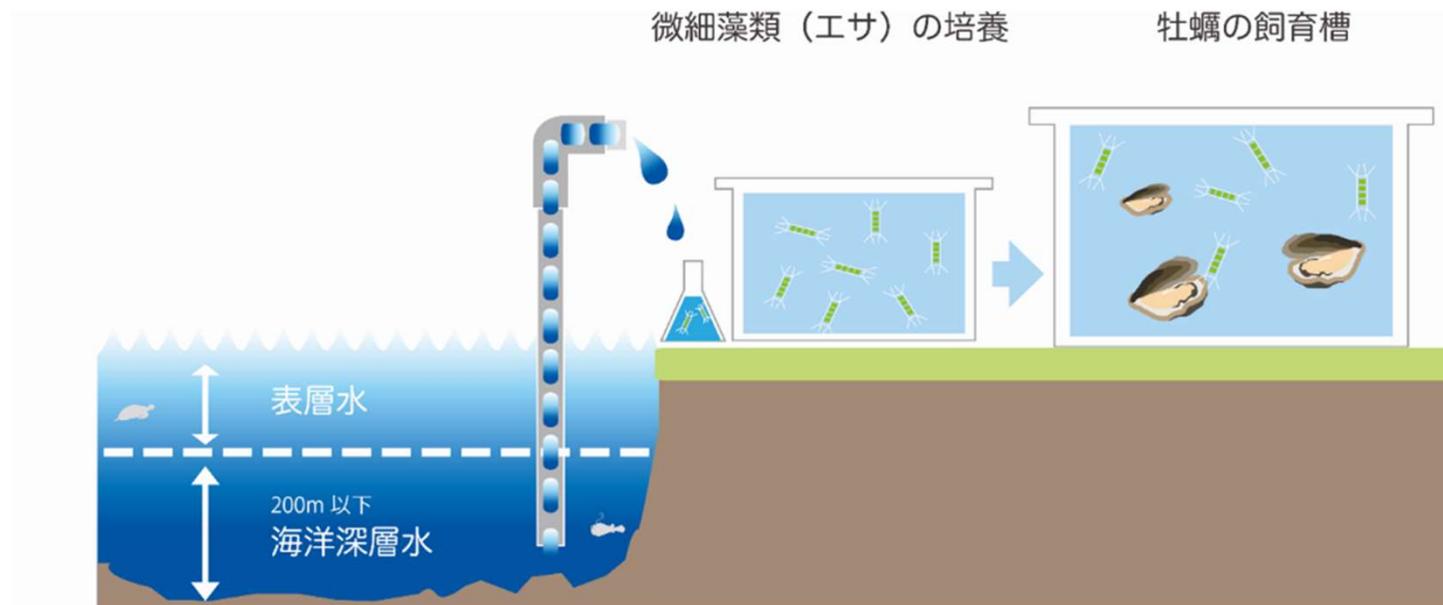
日本中で生産された牡蠣を特許技術の海洋深層水で浄化
現状は、日本中で生産された牡蠣を一旦全て、富山・入善に集め、牡蠣を浄化して、エンドユーザーに提供



世界初！カキの完全陸上養殖の成功

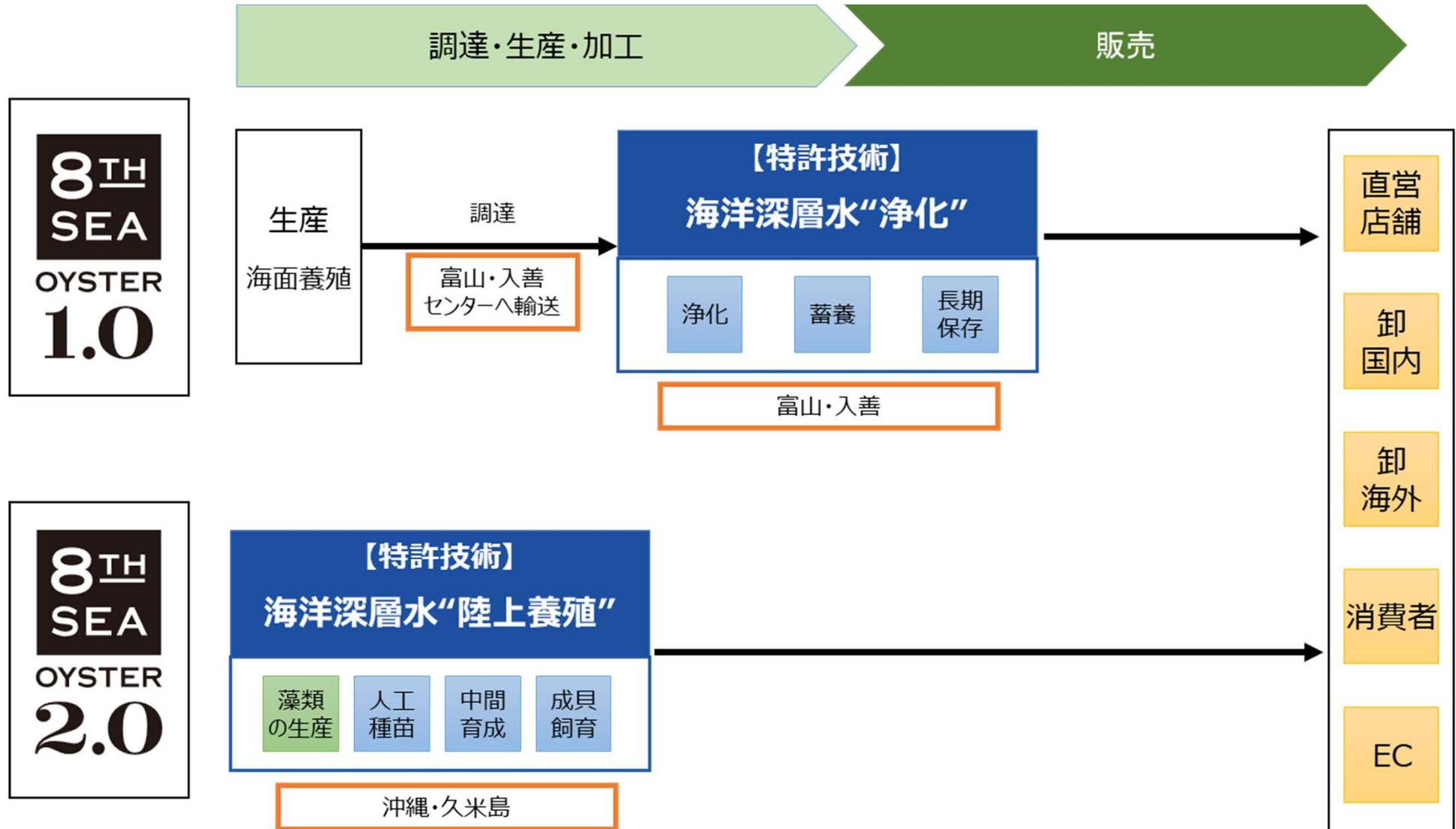
国内外で陸上での種苗採卵や、稚貝と呼ばれる1~3cm程度までの生育は行われていますが、その後は海域に移動し生育されています。これは稚貝以降の成貝までの生育に必要な大量の餌となる微細藻類の培養が困難なことが大きな要因です。

微細藻類の大量安定培養技術、及び完全陸上で成貝まで成育させる飼育技術を確立したことにより、この度、ノロウイルスフリーの“あたらないカキ”の養殖が実現しました。これにより、これまでリスクが高いとされていた牡蠣に、確実な安全性をもたらすことができました。当社では、この“あたらないカキ”を「8TH SEA OYSTER 2.0」と名付けて、ブランド化を図ります。既に本技術は牡蠣の陸上養殖方法として特許を取得しています。（特許第6267810）また、海外においても台湾、中国、米国の3か国にて取得済み、1か国は出願審査中です。



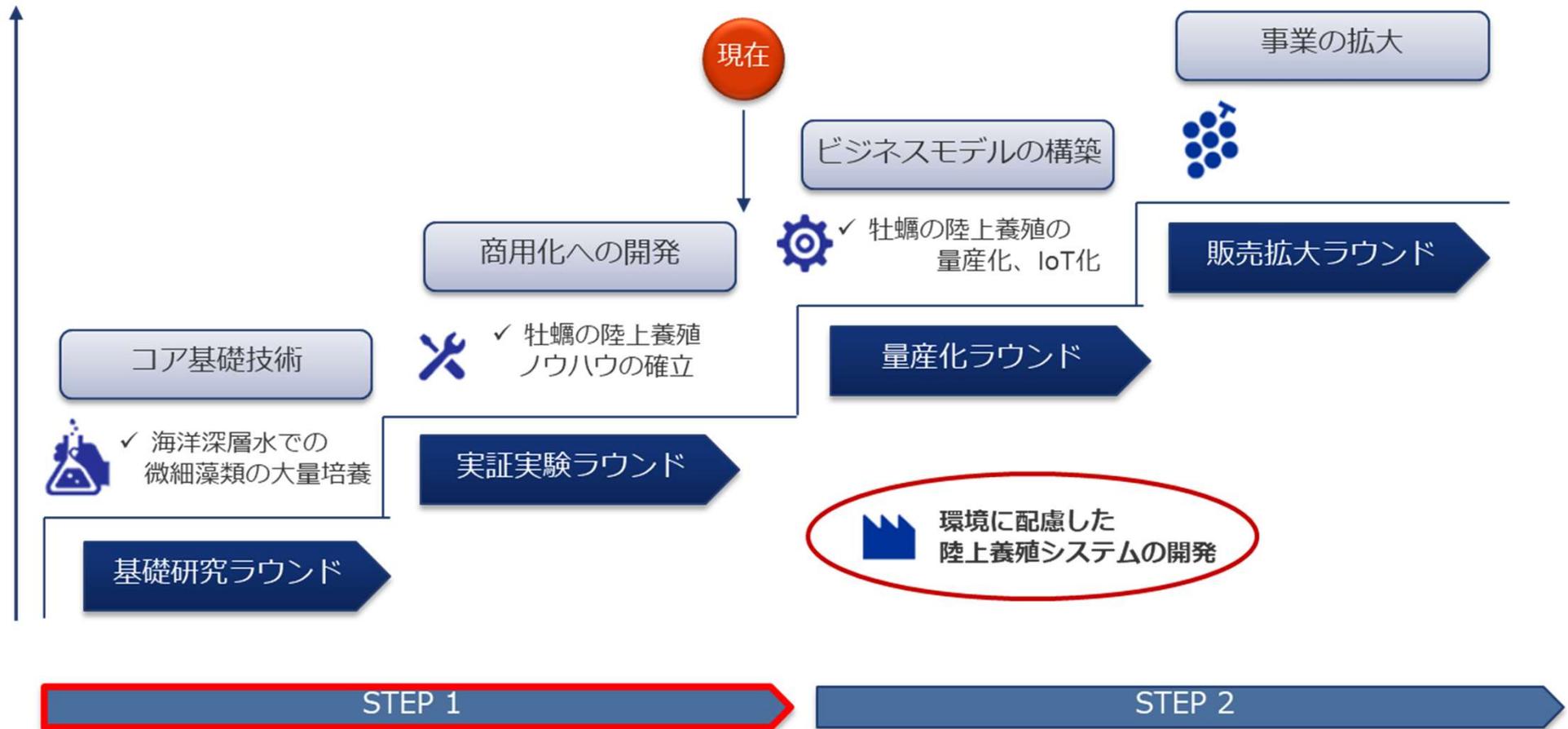
今後の目指す牡蠣の流れ（海洋深層水浄化＋海洋深層水陸上養殖）

2.0の陸上養殖では、生産から水揚げまで、菌やウイルスに影響されない環境下で、養殖を完結。
1.0の海洋深層水の浄化では、牡蠣からいかに菌やウイルスを除去できるかでしたが、2.0の陸上養殖は牡蠣に菌やウイルスが影響されない環境で養殖を完結させる。

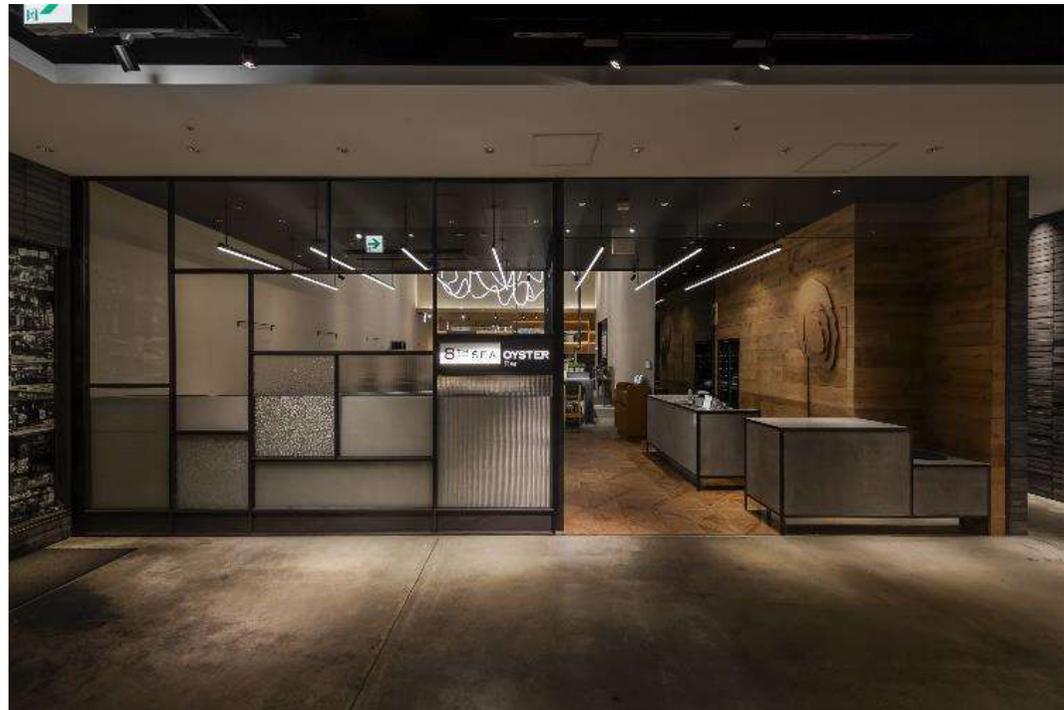


陸上養殖の事業構想

牡蠣の陸上養殖は、今回STEP1のノウハウが確立したことで、今後は、「量産化ラウンド」のSTEP2に移行していきます。量産化の時期は未定



3. 今後の取り組みについて



2024年3月期の経営戦略の見込み

コロナ禍に臨機応変に対応しつつ、再成長へ向けた取り組み

方針	重点施策	進捗状況	活動計画
『守りの取り組み』	コストコントロールの徹底	◎	引き続き、推進
再成長に向けた 『攻めの取り組み』	「EC通販の強化」など 販売チャネルの多角化	◎	引き続き、売上伸長を推進
	店舗事業の収益拡大	◎	少ない売上でも利益を出せる筋肉質なコスト構造への転換が完了。今後も更なる定着化を進める。
	国内卸売事業の収益拡大	◎	2桁成長を維持し、更なる高利益体質に。
	海外輸出事業の収益拡大	△	資本業務提携先の阪和興業と共に、海外市場（特に、アジア、中東）の開拓を進める
	加工事業による収益貢献	△	稼働の改善を進める。
	店舗事業のITを活用しての効率化	○	引き続き、推進
	陸上養殖のアタラナイ牡蠣の ローンチ	◎	実証実験が終わり、量産化の検討を加速。

4. 2024年3月期 業績見通しについて



通期業績の見通しについて

2023年5月15日開示の通期業績予測に関しては、現時点で変更なし。
 筋肉質なコスト構造の定着と、「守り」から「攻め」へグループ全体で質の向上を図り、次なるステージへ向け進化させていく。

(百万円)	2023年3月期 通期実績	2024年3月期 連結業績予想	前年同期比 (%)
売上高	3,764	3,896	+132 (+3.5%)
営業利益	127	130	+3 (+2.2%)
経常利益	128	128	-0 (-0.5%)
親会社株主に 帰属する 当期純利益	138	124	-14 (-10.2%)



General Oyster

本資料に記載されている予測、見通し、戦略およびその他歴史的事実ではないものは、当グループが資料作成時点で入手可能な情報を基としており、その情報の正確性を保証するものではありません。これらは経済環境、経営環境の変動などにより、予想と大きく異なる可能性があります。